

課題検討依頼事項についての意見書

「地域活動を維持・継続するために取り組むべきこと」

令和3年2月18日

泉区地域協議会

令和2年度泉区地域協議会第1回定例会で、泉区長から「地域活動を維持・継続するために取り組むべきこと」というテーマで、課題検討の依頼を受けた。令和2年度は、年度当初に新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けて緊急事態宣言が発出されるなど、地域活動は中止や延期、停滞を余儀なくされた。その影響は1年に及んでいるが、未だ収束の見通しがつかない状況にある。

そこで、今年度は地域が受けた影響や新しい生活様式への対応、地域活動のあり方についての意見交換を行った。地域の取組や課題を共有しながら、事例研究を交え、地域活動を維持・継続するために地域や行政が取り組む解決策を討議したので、ここに意見書としてまとめることにする。

1 新型コロナウイルス感染症拡大の地域活動への影響

(1) 総会は書面開催に

横浜市では、令和2年3月3日から市立学校の一斉臨時休業がはじまり、緊急事態宣言が発出された4月7日から5月25日までは、外出の自粛、区民利用施設等の利用制限がかかった。自治会町内会をはじめとする各団体にとっては、総会の開催時期がのちにいう感染拡大の「第一波」にあたった。このため、地区連合の総会は10地区で書面開催、残り2地区も参加者を絞った縮小開催となった。

(2) 地域の会合は中止から縮小開催へ

緊急事態宣言解除後、6月以降、定例会等の地域の会合は中止から徐々に開催に向け動き出したが、3密（密閉・密集・密接）を回避するため、人数制限、時間短縮、広い会場への変更などが行われた。

(3) 行事は中止へ

区民ふれあいまつりをはじめ、初夏から秋にかけて毎年開催されている地域のまつりが中止になった。小学生なども参加して演奏やダンスなど日ごろの成果を地域に披露する場ともなっていたが、その機会が失われた。伝統文化についても発表の場がなくなった。

(4) 敬老会は中止へ

高齢者は感染すると重症化のリスクが高いことから、多くの地区で開催を見送り、お祝い品等の配布にとどまった。

(5) 飲食を伴うイベントやサロンは中止へ

感染リスクが高まる場面として、マスクを外しての会話、大人数、長時間に及ぶ飲食があげられたため、飲食を伴うイベント、サロンの実施は、最も慎重に取り扱わざるを得ない状況となった。カラオケも中止した。

(6) 体育祭やマラソン大会などスポーツイベントは中止へ

子どもたちが参加するイベントは学校側とも相談しながら決めたが、感染の不安から実施に踏み切れなかった。

(7) 集めた会費の使い道がなくなった

イベントの中止で予定していた会費の使い道がなくなった。

(8) 対面で手渡す回覧板が敬遠された

町内や行政の情報は、多くが回覧板で提供されていたが、接触を嫌がる声があった。

2 課題の共有

- (1) 人材発掘や地域活動を引き継ぐ機会が失われた
顔を合わせる機会が減り、新役員の顔がわからない状況であった。イベントも開催されないので新しい人材の発掘の機会が失われている。行事もなくなり活動を引き継ぐことができなくなっている。担い手不足がより深刻になるのではないかとの声が多かった。
- (2) 地域で集まる場所が消えた
施設の利用制限や居場所の休業などで活動が中止され、高齢者が家に閉じこもり、テレビばかり見る生活になっていた。フレイル（年齢とともに心身の活力が低下して要介護状態に近づくこと）や認知症の発症・進行の心配がある中で、見守りや安否の確認も難しくなった。
- (3) 子どもたちの地域行事への参加が困難に
学校側も感染予防の観点から地域行事への参加には慎重にならざるを得なかった。約3か月間休校が実施されたことでカリキュラムも厳しくなり、学校行事の実施すら難しい1年となっていた。
- (4) 情報伝達の方法を模索
回覧板に頼っていた情報伝達は、感染症の流行時には難しいことがわかった。ICT（情報通信技術：Information and Communication Technology）導入の環境も整っておらず、技術に明るい人材もとぼしい。新しい技術への抵抗もあれば、直接でないとならば伝達が難しい場合もある。必要な人に必要な情報を届けるにはどうしたらよいかを模索した。
- (5) 災害発生時が不安
人が交流する機会が減ったうえに、防災訓練も中止になり、災害が起きたときに助け合えるのが不安である。コロナ禍でも災害はやってくる。

3 解決への10の取組

- (1) 正しい知識を持って臨む
感染はどうして起こるか。正しい知識をもって臨めば、防止しながらできる活動が見えてくる。居場所、通いの場の利用ガイドラインを作成してみる、屋外のイベントは対策をとって実施してみるなど、既の実施している事例が参考になる。すべてを中止にするのではなく、どうやったら活動ができるかを考える。各地区とも、防犯パトロールや清掃活動、農作業体験などは再開が早かった。
- (2) 分散型を取り入れる
一堂に会するのではなく、グループに分け人数を減らして開催する。また、ICTを活用してウェブ会議を開催してみる。イベントは整理券配布や参加予約制にして、一度に人が押し寄せないよう工夫する。
- (3) 情報共有・情報発信はさまざまな手段で
紙回覧だけでなく、ホームページでの情報提供、LINEやEメールなどが活用できるように、体験会や研修会に参加または開催してみる。操作に慣れていきながらグループ・団体にあった伝達手段を取り入れ、地域情報を共有・発信していく。
- (4) 会食を配食に切り替え
集まった会食ができないかわりに、お弁当を取りに来てもらうとわずかな時間でも顔を

会わせられ、安否確認にもなる。フードバンクを利用して食材や未使用食品の提供を受け、お弁当やカレーなどを作った例がある。

(5) 体調が悪いことを伝えられる関係に

体調が悪い時には無理して参加しない。皆が安心して活動できるよう、自分が感染しているかもしれないと思って行動する。

(6) 社会参加でフレイルを予防する

フレイルの予防には、運動・栄養・社会参加が重要である。筋力トレーニングやストレッチなど個人で取り組める予防法もあるが、社会とのつながりによって予防されることが大きい。

(7) 若い世代も一緒に、ハイブリット型をやってみる

オンラインと対面の組み合わせ（ハイブリット型）で、ICTになじみのない高齢者をサポートしながら、参加者の増加や新しい層の参加を狙う。若い世代も巻き込んで行う。

(8) 会費はこれまで使えなかったことの補てんなどに

イベント中止で余った費用は、繰越金をためるだけでなく、感染対策、防災、修繕、機材買い替えなど、これまで後回しになっていた用途に充ててみる。会費そのものを見直し、値下げや硬貨を集めないで済む金額にしたことで集金の負担を軽減した例もある。

(9) これまでの活動の見直しの機会をとらえる

本当にその行事が必要だったか、実施方法に問題はなかったか、話し合いを設けて見直してみる。簡略化、効率化など無駄を省くことができ、負担軽減とともに新しい事業への取組みきっかけともなる。

(10) 災害への備えを忘れずに

災害はコロナ禍でもやってくる。安否確認の方法の周知、防災用品の備蓄など、改めて町内の防災強化に取り組んだ例もある。感染対策を取り入れた防災訓練、町の防災組織運営マニュアルの整備など、この機会ならではの気づきを今後の対策に生かしたい。

4 まとめ ～ つながることをあきらめない、継続のすすめ ～

新型コロナウイルス感染症の拡大で、地域はこれまでの活動が、いかに3密であったかと思われ知らされた。活動の根幹に関わることへの見直しを迫られ、戸惑いも多かった。しかし、日ごろから顔の見える関係を築いてきたからこそ乗り切れたことも多い。中止された行事は多かったが、いったん途切れた活動の再開に向け、各地区が取り組んだことを共有することで、課題解決へのヒントを得ることもできた。それぞれがつながることをあきらめず、工夫し継続していくことが重要であるという結論に至った。これはコロナ禍の限定的な結論ではなく、アフターコロナにもつながるものと考えている。地域の実情に応じて取り組んでいけるとよい。

行政には、地域活動が維持・継続していくように、今まで以上に、正しい情報の発信、ICT活用支援、活動資金の補助、相談できる窓口整備（コーディネート機能の強化）、次世代に続く施策を手掛けていただきたい。また、地域と区役所だけでなく社会福祉協議会や地域ケアプラザ等の施設とも一体となって進めていただきたい。

なお、今回のテーマについてはコロナ禍で十分な議論ができなかったという声もあり、改めてこのテーマが議論できるよう別の機会に託したいと考える。